

# 日遠上人と法華經訓読

## 一、はじめに

私は、法華經為字の様々な訓法に惹かれてこれまで、法華經の訓読ということについて考えてきた。法華經訓読の資料は、平安時代の古訓点によるものに始まる。もともと、すでに奈良時代に訓經―法華經を和訓によって読誦すること―が行われていたという<sup>き</sup>。しかし、それを実際に示す遺品はない。仮名書き法華經などは、訓読で斉唱する<sup>ま</sup>ために必須の物であったはずだが、実際に残っているのは、平安朝でも最末期の物である。しかも、それは断簡でしかない。恐らくそれが実用に供されて、よく使われたものの運命なのであろう。

現在、仮名書き法華經について、版經・写經、零本も含めて二十種にのぼるものが知られている<sup>ま</sup>。仮名書き法華經といえども、元々は漢訳法華經を訓読したものであることはもちろんであるが、早

くから、訓読法華經として伝来してきたものを特に仮名書き法華經というのである。

田 島 毓 堂

一方、訓点資料、あるいは、訓点付きの漢訳法華經からの訓読法華經もある。現在世間に流布している「訓読法華經」といえば、むしろこういう種類のものである。その種類は、簡単には数えられないが、訓読法華經として公刊されているものは、その大部分が、頂妙寺版法華經を訓読したものの系統を引く。そして、これはもとをただせば、心性院日遠上人（二七〇―二八四）の文段經法華經（慶長一七年一六四二）に遡る<sup>ま</sup>。ただ、頂妙寺版<sup>ま</sup>が、文段經に基づくという明証はない。このことについては、更に精査する必要があるが、頂妙寺版の訓点、文段經によることは、ほぼ間違いないと思われる。勿論、これとは全く関係のない訓読もある。折衷的なものもある。しかし、大部分は、頂妙寺版による訓読文である。これにはさらに初版（天保五年1834）によるものと、明治改訓版（明治一九年1886）によるものがある。ただし、頂妙寺版によることを明示するもの

は、ほとんどない。これも、一つの不思議であるが、本稿の趣旨に直接関係しない。頂妙寺版によるもの以外は、ほとんど例外に属する。

頂妙寺版訓読を通じて、日遠上人文段経が今日の法華経訓読に与えた影響は甚大である。そして、日遠上人の訓読に関する考えは、『法華訳和尋跡抄』(元和七年[822成])の中に相当に詳しく披露されている。その中には、日遠上人の言語観も伺えて興味深い。ただ、当然ながらその全てに対して、我々が同意できるかどうかは別問題である。

日遠上人の考えに基づく法華経訓読は文段経に示されている。しかし、成立時期として文段経より後に位置する『法華訳和尋跡抄』には、それから一步進めたところもある。日遠上人の法華経訓読全般について、逐次、検討していく予定であるが、本稿においては『法華訳和尋跡抄』中に見られる為字に関する言及に照らし、現行流通している法華経訓読文について、検討していこうと思う。

## 二、『法華訳和尋跡抄』中の為字訓に関する言及<sup>注7</sup>

日遠が対象にする法華経は、八卷本妙法蓮華経(春日版)である。従って、為字は六一六字有る。『法華訳和尋跡抄』の中には次のよ

うに為字について言及がある<sup>注8</sup>。

為字を含む句を掲げて、それについて見解を述べるのは全部で一二カ所、取り上げられる為字は二一六字、その内為字訓が示されないのは五二カ所(為字五六字)、つまり、一二〇カ所(為字一六〇字)で為字訓が示される。これは、一字一字の為字に対して為字訓が示されている場合と、いくつかの同類を纏めて示す場合があるが、結局、全為字の三分の一以上が、取り上げられ、その内、為字訓を示しているものが四分の一を越える一六〇字に達しているのである。為字訓の示されないものは、直接示されないだけでわざわざ示す必要のないものが大半であるが、為字を掲出句の中に含むだけで、それが問題の中心でないものも少数有る。

日遠上人の言及を全部を示すことは出来ない。その一部を掲げる<sup>注9</sup>。(元々は漢文形式であるが訓読して示す。小さな文字の平仮名は補読したものの、同じく小字の片仮名は原文にある振り仮名及び送り仮名。漢字と同じ大きさの片仮名は原文での本文中の仮名であることを示す。仮名字体は通行の字体とする。○内は再読文字、□内は不読字。…は中略)。

①…常に諸仏<sup>ニ</sup>称歎<sup>セル</sup>、コトヲ「所」為<sup>テ</sup>、慈<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>身<sup>ヲ</sup>修<sup>メ</sup>…文…又為<sup>テ</sup>字<sup>ニ</sup>多<sup>ク</sup>訓有<sup>リ</sup>。補注<sup>ニ</sup>毎卷<sup>之</sup>を<sup>出</sup>す。彼<sup>ニ</sup>順<sup>シテ</sup>訓字<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>和訓<sup>ヲ</sup>モ之<sup>を</sup>読<sup>む</sup>可<sup>キ</sup>也。俗書<sup>モ</sup>、皆訓<sup>の</sup>如<sup>ク</sup>読<sup>ム</sup>、其<sup>の</sup>例<sup>也</sup>。今<sup>ノ</sup>為<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>訓<sup>す</sup>。故<sup>ニ</sup>エトヨムヘキ也。(No.1の為字、序品、『法華音義類聚 乾』157~158頁)

②為<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>喜<sup>ヒト</sup>不<sup>レ</sup>文<sup>ニ</sup>補注<sup>ニ</sup>、為<sup>レ</sup>是<sup>ニ</sup>訓<sup>ス</sup>。故<sup>ニ</sup>尔<sup>ノ</sup>読<sup>む</sup>可<sup>キ</sup>歟<sup>。注10</sup>。(No.



も普通の和訓ではない。もつとも、コレと言つても、決して代名詞ではなく、繫字なのであるが、訓読では誤解を招くような所がないではない。マサニ、ベシ、サダメテ、ウ、カウブル、コレ、ナツク、モチいずれも特殊訓と言つてよいものである。定・名・得・被などの為字訓を持つ為字はほとんど取り上げられている。是訓為字も三分の二近く取り上げられている。『尋跡抄』に取り上げられ、然も為字訓のないものは、五六字有るが、為為章の訓でみると、被訓例八、是訓例一二、以訓例六、与訓例一二、作訓例一三、与作二訓例一、以作二訓例一、作是二訓例一、無訓例一、不掲載のもの一である。これらのなかには、和訓によつて、為字訓を生かしているものもあり、二訓のうちのいずれによるかを論ずるものもある。為字がたまたま含まれているにすぎないものも若干ではあるが存する。

既<sup>レ</sup>上掲例の中にも、興味有る例があつた。一々検討してみる価値があるものが多いが、本稿では、紙数の関係もあり、逐一それを行う余裕はない。いずれ、別の機会に更に検討したいと考えているが、ここでは、特に為字訓をもとにその訓法を論じている若干の箇所について考察し、さらに、現代流布の訓読法華経の源流に成つた日遠上人の読み方を引き継いだり、引き継がなかつたりしている中で、なお為字の読み方に関して問題が残っている例について考えを述べたい。

### 三・検討すべき若干の用例とその訓読

前節の⑤は「定」か「是」かを論じて、「定」がよいと断じたものである。ただ、現代語の感覚からいえば、なぜ「定」なのか、「サダメテ」という和訓がここに適するのかが問題ではあるが、それについては、既に詳細に論じたのでそれに譲る<sup>12</sup>。ここでその結論だけ述べれば、為字をサダメテと読むのは定訓によつたものであること自体は明かであるが、「定」の中国語としての疑問構文における用法が、サダメテという訳語に必ずしも完全には当てはまらない。しかし、逆に、そういう疑問を表すような文脈でサダメテが使われることにより、サダメテが断定の意味ではなくて、疑問の意味を持つに至つたという語誌に関する事情を見ることが出来る。

⑥或<sup>ハ</sup>当<sup>ニ</sup>墮落<sup>シテ</sup>火<sup>ニ</sup>燒<sup>ル</sup> 「所」為<sup>ル</sup>（当）シ文 此<sup>ノ</sup>為被<sup>ニ</sup>訓<sup>ス</sup>。補注・科註・句解、皆尔也。是<sup>ノ</sup>如<sup>キ</sup>文、一部ノ内、処<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>有<sup>リ</sup>。余<sup>レ</sup>亦例文多<sup>シ</sup>。不動羅漢<sup>ヲ</sup>釈<sup>シテ</sup>煩惱<sup>ニ</sup>退動 「所」被<sup>レ</sup>不<sup>ト</sup>云<sup>カ</sup>如<sup>シ</sup>云<sup>モ</sup>。是<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>を以<sup>テ</sup>為<sup>ニ</sup>代<sup>タリ</sup>。今句解<sup>ニ</sup>モ亦被<sup>大業火</sup>之所<sup>燒</sup>炎<sup>ト</sup>云<sup>モ</sup>。亦被<sup>レ</sup>を以<sup>テ</sup>之<sup>ニ</sup>代<sup>タリ</sup>。然<sup>キ</sup>被<sup>字</sup>無<sup>ク</sup>、只火之所<sup>燒</sup>ハカリニテモ、ヒニヤカルトヨミ、又所字無<sup>ク</sup>為<sup>火</sup>燒<sup>ト</sup>ハカリニテモ、ヒニヤカルトヨム。サル故<sup>ニ</sup>、今二字アリテモ、亦ヲシツカネ打<sup>マ</sup>タゲテ、ヒニヤカルト読<sup>ミ</sup>可<sup>キ</sup>歟<sup>ト</sup>覺<sup>ラ</sup>リ。マタゲテ読<sup>ミ</sup>例、芥子如<sup>許</sup>ノ類也。問<sup>ト</sup>、如<sup>芥子</sup>許<sup>ハ</sup>、如<sup>許</sup>ノ字、別也。

マタケテモヨムヘシ。被所、俱ニ同意也。合<sub>シテ</sub>之<sub>を</sub>讀<sub>む</sub>可<sub>ら</sub>不<sub>し</sub>。故に、大火<sub>ニ</sub>燒<sub>か</sub>所<sub>カウムル</sub>為<sub>カウムル</sub>、尔<sub>カウムル</sub>讀<sub>む</sub>可<sub>き</sub>也。答<sub>ハヤ</sub>、ヒニヤカル<sub>ニテ</sub>聞<sub>ク</sub>リ。又、被<sub>カウムル</sub>ヲ加<sub>ハ</sub>ヘ<sub>ハ</sub>重言<sub>ニ</sub>似<sub>タリ</sub>。況<sub>ヤ</sub>若<sub>シ</sub>所問<sub>ノ</sub>如<sub>ク</sub>ン<sub>ハ</sub>、下<sub>ノ</sub>所字<sub>之</sub>無<sub>ク</sub>シテ、被<sub>カウムル</sub>火燒<sub>アル</sub>時<sub>モ</sub>、ヒノヤクコトヲカウムル<sub>ト</sub>讀<sub>む</sub>可<sub>キ</sub>歟。其時<sub>ハ</sub>ヤカル<sub>ト</sub>讀<sub>ム</sub>ヘシト云<sub>ハ</sub>、何<sub>ん</sub>ぞ二字<sub>ノ</sub>時合<sub>シテ</sub>ヤカル<sub>ト</sub>讀<sub>ま</sub>不<sub>ラ</sub>シヤ。況<sub>ヤ</sub>如<sub>ク</sub>芥子許<sub>ヘ</sub>別<sub>ノ</sub>字<sub>ナル</sub>故<sub>、</sub>合<sub>シテ</sub>之<sub>れ</sub>を讀<sub>む</sub>可<sub>シ</sub>ト云<sub>ハ</sub>、別<sub>ノ</sub>字<sub>サ</sub>ヘ猶<sub>ハ</sub>合<sub>シテ</sub>讀<sub>ム</sub>、況<sub>ヤ</sub>同意<sub>ノ</sub>字<sub>、</sub>合<sub>シテ</sub>讀<sub>ム</sub>何<sub>ん</sub>ぞ惟<sub>シ</sub>ヤ。耶。(卷<sub>第</sub>83、譬喻品、237頁-239頁)

この後まだ半丁分問答往來して、最後に「今<sub>ノ</sub>為<sub>火</sub>所燒<sub>、</sub>亦合<sub>シテ</sub>ヤカル<sub>ト</sub>讀<sub>む</sub>可<sub>キ</sub>ト、何<sub>ん</sub>ぞ之<sub>を</sub>疑<sub>ハ</sub>シ耶。學者能<sub>ク</sub>之<sub>を</sub>思<sub>ヘ</sub>。情<sub>ニ</sub>順<sub>シテ</sub>理<sub>を</sub>曲<sub>ル</sub>莫<sub>シ</sub>。」と締めくくる。最後の一句が具体的にどういうことを指しているかは不明である。ただ、全体として、「為<sub>火</sub>所燒」の中に、「為」「所」と二字分かれてあつても一訓でいいという主張と、被訓に引かれて「カウムル」と読む必要はなく、「ヤカル」で十分で「ヤカルコトヲカウムル」と読めば重言だといっていることである。①で得訓為字を「訓字の如く和訓も読むべし」と言っているのとどういふ関係になるか。

得訓為字も被訓為字も共に構文としては、(イ)「為<sub>十</sub>名詞<sub>十</sub>動詞」、(ロ)「為<sub>十</sub>名詞<sub>十</sub>所<sub>十</sub>動詞」、(ハ)「為<sub>十</sub>名詞<sub>十</sub>之<sub>十</sub>所<sub>十</sub>動詞」、(ニ)「為<sub>十</sub>所<sub>十</sub>動詞」である。得訓為字は、(イ)六例、(ロ)五例、(ハ)六例、被訓為字は、(イ)一例、(ロ)一六例、(ハ)六例、(ニ)二例である。訓読すれば共に日本語としては受身構文

である(但し、得訓為字には、受身構文にならないものもある)。得訓為字と被訓為字の違いは意味する内容による。得訓の為字を含む文における、上記の「名詞」は「諸仏」「如来」「如来の肩」「如来の手」「釈迦牟尼仏の手」「釈迦牟尼仏の衣」「千仏」等尊敬すべき存在である。動詞は、「称歎」「敬」「愛念」「供養」「讚歎」「荷担」「護念」「摩其頭」「恭敬」等受けることが望ましい行為を表す。一方、被訓為字を含む文の名詞は、「火」「大水」「生老病死憂悲苦惱」「三界火宅」「諸小虫」「毒」「食欲」「魔」等、マイナスイメージの語であり、動詞は「焼・焚・焼煮・焼害」「逼」「害」「悪賤」「打擲」等、全てうけること好ましくない行為を表す。

日本語では、「くされる」という表現自体、既に積極的にそうされたいことを望むことではないのが普通であり、いわゆる「被害の受身」の表現となる。それ故、日遠上人は漢文では同じ構文を、一方は「くらるることをう」とし、一方は「くらるることをかうむる」と言わず「くらる」だけで良いとするのであり、すこぶる理にかなっている。実際、この例の訓読の仕方を辿ってみよう。

平安時代古点本の龍光院本は「火に焼かるることを為<sub>カフ</sub>らむ」となっている。被訓為字は古点本の龍光院本や立本寺本では、ほぼ同じように「カウムル」「カフル」と読んでいた。仮名書き本の妙一記念館本や足利本は「ひのためにやかれぬへし」と為字訓は関係しない。心空の倭点法華経は「火のために焼かる」と為字訓はやはり無

関係である。日光輪王寺天海蔵の高麗本法華經の訓点は二種類の訓読を伝え、その一方は、為字を「カフムル」とする。以後日遠上人に退けられた「カウムル」は出現せず、「火に焼かる」か、奇妙な読みだが「火に焼かるる」とするものばかりになる。日遠上人の影響は極めて大きい。これだけでははつきりしないが、逆に、得訓為字の訓読をみればより鮮明になるだろう。

①の例をみよう。平安時代古点本で「常に諸仏に称歎せらるる」とを為タリキ(立本寺本)、「くを為たり(龍光院本)で、共に「えたり」と読まれている。仮名書き本は「のために称歎せられ」、倭点も「諸仏のために称歎せらるる」であるが、日遠上人の伝統を汲むものは全て「称歎せらるることをえ」一色であり、近代の訓読でも、そうでないものは見つけるのが難しい。

この例は、日遠上人の読み方の流布をみたのであるが、為字訓自体が、何ともならない例もある。

⑦得成為仏(一仏ニ成為得)文恵心、両仮名等、皆、成為ノ二字合シナルト点。其義尤も聞タリ。補注・科註ニ此為當と訓セリ。此ノ偶并ニ須菩提ノ記ニ亦此語有リ。皆訓當。不審限リ無シ。或、義推シテ云、恐ハ是レ余ノ章、當得作仏、當得成仏ト云カカ如ク、一本云為得成仏故、釈者云訓當(「恐ハ」以下「云訓當」まで読めず。「當得」と「為得」を同趣として、「為」当」としたと、言うようである)。然レ後人、釈ノ中ノ為得成仏ノ文、經現本ノ得成為仏ニ違レ見テ、即ち釈文ノ為得成仏を改メ、亦得成

為仏と作す歟。或云、今既に未來成仏ヲ記。仏ト成為レト讀ミ可也。答、然ル可。不。觀藥王藥上菩薩經ニ云、於過去莊嚴中、得成為仏、至於賢劫中、得成為仏、至於未來星宿劫中當得作仏、故、普賢經、亦現在仏説、云ク、今十方に於いて、各仏ニ為レ得。又宝塔品に云、我為仏道。此為、仏之言ニ例スルニ、弥知ヌ、今ノ成、為、二字合シテナルト讀ミ可キトナリ。況ヤ正法華、亦得成為仏ト云。或、速成無上正真、為最正覺ト云(「速」の読み不明)或、或長行ニ、當得作仏ト云。偈頌ニ、當得為仏ト云。是正に為を以て作に代ふる也。故知ヌ。今、得成為仏、「之」為、成ニ訓シ、作に訓スヘキト分明ナリ。然モ末師、當に訓すと云者、上言の如し。或恐レハ誤歟。(『184・188・192、授記品、309頁〜310頁』)

「於最後身得成為仏」(授記品)の為字の読みを問題にしている。文段経では「最後身に於いて仏に成、為、得」と読んでいる。同じ文句が五百弟子受記品にもある(『264』)。「成為」の部分の読み方は同じである。為字訓は、日相本や科註などに作訓があるほかは全て当訓である(科註の為字訓はともかくとして、日相本の為字訓は日遠上人の影響だと思われる)。日遠上人はこの当訓に対して上記のように不審を抱き、種々検討して、「誤りか」とし、二字合して「なる」と読むべきことを主張している。

現に、この三例の訓読に当訓が生かされたものはない。僅かに、立本寺本の訓読に「為に仏と成ること得む」とあり、為字に「當也」



トハカリアリ。不可然也。(No. 112、譬喩品、260頁)

サ変動詞として「救護ス」と読んではいけないと言う。理由は述べていないが、原漢文に「為」字があるのに、サ変動詞として読んでしまうと、為字無しで、サ変動詞として読む場合との区別が無くなることを嫌ったためかも知れない。

この例は妙一記念館本や足利本等、仮名書き本が「くこす」と漢語サ変動詞の形で読んでいる他は、日遠上人の影響下の訓読は勿論、それ以前の訓読も、為にスしか送ってなくて、本当の読み方は不明なものはあるが、おおむねナスとしている。

他にNo. 396「不…以為親厚」(安樂行品)も同様である。これを「親厚ス」とサ変動詞にするのが仮名書き本だけであることも、同じである。但し、「親厚ヲナス」ではなく、「親厚トナス」とする例もあり、日遠上人が良くないとする「親厚スルコトセザレ」と読むものもある。No. 429の「以為給使」(安樂行品)も類例で、これを「給使ス」という漢語サ変形とするのは仮名書き本のみ、あとは「給使スルコトヲナス」「給使ヲナス」「給使スルコトヲス」などである。以上は、いずれも作訓為字である。

No. 492「不可為譬喩」(随喜功德品)は得訓為字であるが、少し扱いが異なる。得訓によりそのまま「譬喩ヲ為ベカラズ」(龍光院本)とするもののほか、「譬喩ト為ベカラズ」(伝光明皇后筆本・倭点)、「譬喩スベカラズ」(妙一本・足利本)、日遠上人も得訓に

より「譬喩ヲ為ベカラズ」とし、頂妙寺版初版はこれに従うが、明治版以降は為字訓の支えを失ってウ訓に疑問を持ったためか、「譬喩ヲ為ベカラズ」とし、頂妙寺明治版による訓訳法華経は「譬喩を為すべからず」としてしまう。他に「譬喩ヲ為ベカラズ」(淨嚴『冠注略解妙法蓮華経新註』)がある。岩波文庫本は「譬喩を為べからず」とする。得訓為字でも特殊な例である(①とは違う)。ここでも、仮名書き本は漢語サ変動詞として読むが、同じ意味でも他では「譬喩」を目的語にしたり、為字の読みをスとしたりナスとしたりである。原漢文が残っている場合、為字を、語尾のように見えてしまふ漢語サ変動詞にはしにくい意識が働くのだと思われる。

多くは、日遠上人の言う通りに訓読している。又、日遠上人は多く為字訓に従っている。⑧のように難しいけれども、日遠上人の廃した為字訓が捨てがたいもの、⑦のように、日遠上人の言う通り、不審な為字訓もある。但し、この⑦⑧のような例は少数である。日遠上人もいずれと決していないものについてみよう。次に一例する。

#### 四. 問題の訓読

⑩勤<sub>テ</sub>法<sub>ニ</sub>為<sub>メ</sub>不<sub>レ</sub>文 (左訓:勤<sub>テ</sub>法<sub>ヲ</sub>為<sub>メ</sub>不<sub>レ</sub>文) 補注、科註、為<sub>メ</sub>向<sub>ニ</sub>訓<sub>ス</sub>。句解、求<sub>メ</sub>以<sub>テ</sub>為<sub>メ</sub>積<sub>ス</sub>。(No. 336、見宝塔品、373頁)

ここでは、両訓を併記するだけである。文段経も左訓モトメは朱で記している。この例、為字訓は「助」(写本為為章)、「与」(版本為為章)、「向」(補注・科註・文段経・天海藏高麗本)、句解はこの部分を「諸人云何不勤為法 汝等諸人云何之故不能精進勤求大法」(法華經句解中統藏 62頁)としている。この為字訓に従い、訓読は種々である。「法ヲ為ケザラン」(立本寺本)、<sup>ムカ</sup>「法ニ為ザラン」(天海藏高麗版・文段経右訓・頂妙寺版初版・平楽寺版兩点本)、「法ヲ為ザラン」(文段経左訓)、その他は「法ノ為ニセザラン」である。頂妙寺版も為字訓の支えを失った後は「ムカフ」という訓に対して疑問を生じ、「タメニス」と改訓しており、現在の訓読も多くこれに従っている。

為字訓は区々であるが、いずれも去声である(句解はこの一句の解釈であり、為字訓ではない)。何故、いずれも、為字を動詞とするのか。「助」と言っても「助ける」という動詞を意味しない。「…をタスケテ」(英語の help などに当たる)であり、「向」も同様、「…にムカフ」ということである。与訓を少し詳しくしたものである。それを何故動詞とするのか。決して難解な例ではない。素直に「諸人云何ゾ法ノ為ニ勤メザラン」と読めばいいのである。この文の動詞は「勤」である。これを「ツトメテ」と副詞にしようので、他に動詞が必要になり、為字を動詞として読んでしまったということだと思う。一つとして「法のために勤めざらん」という訓読が無い

のを大変不思議に思う。為字訓に導かれれば自然にこのように訓読できる。

このように為字訓によって読めばいい例が大部分であるが、ただ、為字訓の意味するところが分からない⑦のような例もあった。次にもう一例、今ひとつしっくりしないものを上げてみる。

⑩無量大衆ノ恭敬ニ圍繞セルヲ為文 尔説可也。為以に訓。又圍繞ノ点前後同。(No. 547, 485頁)

「為無量無辺菩薩大衆恭敬圍繞而為說法」(妙音菩薩品)の上の為字に関するものである。これを「無量無辺ノ菩薩大衆ノ恭敬ニ圍繞セルヲ為<sup>テ</sup>法ヲ説キテ<sup>ツ</sup>」(文段経)と訓読するのである。文段経はこの左に「以」も注している。為字訓を持つものは例外なく文段経の読みと大同小異である。そうでないものは「無量無辺菩薩大衆ノ為ニ恭敬ニ圍繞セルヲ」である。伝光明皇后筆本・妙一本・足利本・倭点・科註等である。頂妙寺版は明治版以後もこれは改訓されていない。果たしてこの読み方で万全か。確かに為字訓は「以」であり、「以」であれば「モテ」と読まれてきた伝統がある。しかし、日遠上人自身、以訓なら何でもモテではなく、モテが十分に真意を伝えないものについて、与訓のタメニとは違うと注した上でタメニと読む例もあった(No. 2, 108頁)。モテ訓は現代語の感覚からは甚だ不十分・不適切な訓であるが、かつてはこれで良かったのだろうか、不審である。この例は、以訓によってモテと読まれたことは疑いを入れないが、

決して適切ではない。以訓自体は疑われていないが、果たしてどうか。文意は「無量無辺菩薩大衆」に「恭敬され圍繞されて」法を説いたというのではないか。とかく、受身構文が、被害を被るような場面、文意に用いられるために、避けられたように思われる。と言って、得訓も無かつたため、得訓為字のように読めなかつたのだろうか、以訓が適切とは思えない。「為十名詞十動詞」という「之」

「所」のないの構文で、得訓為字も、被訓為字も用いられている。

その点で、この例を受身として読むことは差し支えない。日遠上人が、モテ訓のまま放置し、為字訓も以訓であつたために、右のような訓読がまかり通つてきた。⑩は為字訓を尊重することによつて正解が得られると思うが、この⑩はまた違う意味で検討しなければならぬ例である。

## 五. おわりに

日遠上人は、また、言葉遣いの面で鋭い感覚の持ち主であつた。『法華訳和尋跡抄』を通じて、訓読に対して抱く原則は、簡潔を尊ぶこと、そのため、音読も多く採用する。同じ文字でも音読すべきものと、訓読すべきものを峻別する。また、余分な語句を徹底して排除する。過去や完了の助動詞の使用については、全てに付ける必

要はなく歴史的叙述における過去の助動詞の使い方と類する考えを披瀝する。敬語などについても、仏世尊に対してのみ使い、他は徹底して廃し、然も、仏自身の言葉については「御自言」であるとして敬語使用を排除する<sup>15)</sup>。日遠上人は、種々の資料を見ているが、訓点・訓読史料に関しては具体的には心空の倭点法華経以外ははっきりしない。勿論、名前は違つていても、仮名書き法華経は日遠上人の見た資料と近い点が知られているし<sup>16)</sup>、実際確かめてみればはつきりする。ただ、日遠上人に全面的には賛同できない所があるのは当然である。特に、言語の歴史的变化という事に関しては、あまり関心を払つていなかったように思われることがある。時に、日遠上人当時の言葉の感覚で処理していると思われることが何われ、それはそれで、当時の言語感覚を知る上で貴重ではあるが、『法華訳和尋跡抄』の記述に全面的に依拠できない一つの理由もここにある。また、取り上げられた部分が何を意味するか分からないこともある。ただ、それも、実際に訓読の有様を多くの資料によつて検すると、何が問題かが浮かび上がってくる可能性がある。今後、この注釈研究を進めていきたいと考えている。

注

注 1 禿氏祐祥氏「法華經の訓經について」『龍谷史壇』32 1949

兜木正亨氏『法華版経の研究』1954

注 2 仮名書き法華経は、女性のための物であるという事が言われる。それも否定は出来ないが、それだけではなく、訓読斉唱用ということも当然想定される。訓点本での訓読斉唱は殆ど不可能であろう。

注 3 拙著『法華経為字和訓の研究』に十九種紹介した。ここに紹介していないものとして、九州大学図書館所蔵の写本『和訓法華経』がある。刊本の写しと思われるものである。

注 4 拙稿「頂妙寺版法華経の成立」『日本・中国における近世の社会と文化』(昭和61年・62年・63年特定研究 名古屋大学) 1989

注 5 天保五年(1834)頂妙寺日贍が諸本を比較し訓点を施したものの、以後盛行している。明治一八年には水野日顕師によって改訓され、銅板されて現在まで用いられている。

注 6 拙稿「仏の御自言—『法華訳和尋跡抄』にみる日遠の敬語観並びに自敬表現による法華経訓読—」『日本語論究』5 敬語』和泉書院 1997 は、副題にある通り、『法華訳和尋跡

抄』から、日遠の言語観を読みとり、法華経の訓読について検討したものである。ただし、その訓読は、本稿で対象にしようとする現今流布のそれに限らず、訓読全般を取り扱う。今後、さらに『法華訳和尋跡抄』全体について精査する予定である。

注 7

為字訓、為字和訓等について詳しくは、注 8 の拙著を御覧いただきたいが、念のためにそれについて一言述べておく。為字訓とは、唐・慈恩大師窺基『法華経為為章』に由来する、法華経中の為字の意味を示す漢字注を言う。法華経中の為字を含む語句を原則として四字取り出して、それぞれの為字に「訓」と記すものである。平声九訓「由・求・当・得・定・被・作・是・名」、去声三訓「以・与・助」である。この一々について、どういうものがどれだけあるか、どういう和訓に対応するか等は、為字和訓の研究そのものなので、簡単には言えないが、この為字訓により、平安時代から、法華経中の為字の和訓が生まれてきており、古辞書等でも見られない和訓が為字に対して施されているのは、正に、為為章の為字訓によっているのである。但し、日遠上人は為為章を引用しない。江戸時代になれば和刻本も出版されるが、あるいは日遠上人の目には触れなかったのかも知れない。宋の永嘉義撰『法華三大部補注』や『妙法蓮華経科註』によって

為字訓を掲出する。補注の為字訓も、慈恩大師に由来するとは明かであるが、それが為為章だと断定する証拠はない。

もつとも、「為為二字平去両呼、慈恩基師別有章門、訓釈其義」として為為章とほぼ同内容のことを七カ所に分載しているのを見れば、その「別章門」とは法華經為為章以外に考えられない。とはいえ、補注では、為字訓が、平声で十訓、去声で四訓とそれぞれ「成」「向」一訓ずつ増えている。これをどう考えるかは難問である。現在知られている伝本が最古の物でも室町時代を遡ることが出来ない状態では、断言は出来ないが、恐らく、伝本の問題に帰するであろうと思われる(↓法華經為為章考『法華經為字和訓の研究』第二部第一章)。

平声の内、多いのが「作」「是」であり、去声では「与」が圧倒的に多く、「以」もその三分の一ぐらいである。平声・去声ほぼ半々であるが、去声が若干多い。代表的和訓は、求…モトム(この例殆どないに等しい)、当…マサニ・ベシ、得…ウ、定…サダム、被…カウムル(ラ)ル、作…ス・ナス、是…コレ、名…ナツク、以…モテ・タメニ、与…タメニ、助…タスク(この例も殆どない)、成…ナス、向…ムカフである。「由」訓為字は実際にはない。

なお、平安時代の法華經訓点資料には、この為字訓によって生じた為字和訓が見られるが、中世の資料には殆ど見られ

なかった。但し日光輪王寺天海蔵の高麗本法華經には為字訓と、それによる和訓が見られる。また防府天満宮蔵の法華經にもわずかにそれが見られる(小林芳規・松本光隆両氏「防府天満宮本妙法蓮華經八卷の訓点」『内海文化研究紀要』12(1984)。

校成図書館蔵の五山版妙法蓮華經科註には江戸時代の和刻本科註同様為字訓が少数ながら印刷されている。但し、この為字訓は内容的に為為章・補注のそれとは相当隔たりがあり、何によつたか不明である。近世になり、日遠上人は補注・科註等により為字訓を注し、それによって和訓を施した。日相本妙法蓮華經は音読用であるが、為字訓が付されている。何のためか分からない。然も、やはり内容的には他の為字訓と相当異なる。前記の如く江戸時代に盛行した科註には為字訓が付され、それによつてその本の所持者による和訓書き入れが多く見られる。この為字の読み方により、訓読の系譜が粗々たどれるのである(↓為字和訓よりみたる法華經訓読『法華經為字和訓の研究』第二部第七章)。

拙著『法華經為字和訓の研究』資料編に全ての為字と所在を示した。拙稿「法華經為字和訓考 序説」『名古屋大学文学部三十周年記念論集』1979には索引の形で示した。

『法華訳和尋跡抄』は元和七年(1622)に完成したものを寛永十九年(1642)板屋宗胡の刊行したものが有る。『法華音義類聚

注8

注9

『乾』1971に複製されたものは寛文九年1668の法華宗門書堂の版である。詳しくはそれらによられたいが、必要な部分は『法華經為字和訓の研究』の資料編に示した。

注10 拙著『法華經為字和訓の研究』七頁・三五頁・三六頁・三九頁・九五頁・一〇五頁等。

注11 拙著『法華經為字和訓の研究』七三頁に写本為為章の訓を分類した一覧表を掲げた。それによれば、六一八字の為字に對して、五九八カ所に重複訓も含めて六一八訓有る。無訓箇所一四、掲出のない箇所が六である。訓とその数を記す。( )

内は重複訓の数(外数)。由一、求〇、当九(二)、得二六、定八、被二六(二)、作一一二(六)、是九八(六)、名九、以上平声合計二八九(二六)、以七七(一)、与一三三二(二)、助〇、以上去声小計三〇九(四)、合計五九八(二〇)である。

注12 拙著『法華經為字和訓の研究』第一部第三章。

注13 得訓為字は注11示したように二六例あるが、受身構文になるものは一七例、為為章では得訓ではないが、同様のものと考えられるものを加えて一八例である。他は、得訓では十分でないものを含めて、好ましい状態になることをいうのが大半である。中にもどうしても理解しにくい例がある。例えば、後述するNo.492の「不可為譬喻」はこの中には含めにくいし、「何為見捉」(No.145)のようなものはどう考えたらいいの

か、得訓はすこぶる疑問である。拙著『法華經為字和訓の研究』第一部第二章。

注14 この例、門前正彦氏『立本寺藏妙法蓮華經古点』(訓点語と訓点資料)別刊第四(1968)によれば、為字訓はない。しかし、立本寺本原本には「助」訓があると推測される。広浜文雄氏「漢字の読み」『訓点語と訓点資料』32輯(1966)によれば、立本寺本の訓点を移点したという天理図書館本のこの箇所には助訓があるという。門前氏自身同書の解説研究篇では「為<sup>助</sup>」としている(138頁)。

注15 林義雄氏「法華訳和尋跡抄所引法華經古訓と足利本仮名書き法華經について(上)」『二松学舎大学東洋学研究所集刊』10(1975)

野沢勝夫氏「法華訳和尋跡抄所引の仮名書き法華經について」『昭和学院短期大学紀要』17(1981)